

# こども 教育 文化

第15号

もくじ

「ごんぎつね」やまばのテーマと発問プラン

齊田 久典：1

英語 中学1年での実践—小学校とのつながり—

桑原 孝：5

宮城の教育遺産 15

「ずばる教育研究所」があつた

：9

「ごんぎつね」

## やまばのテーマと発問プラン

齊田久典

みやぎ教育文化研究センター主催の「夏休みこくご講座」で提案するために私達のサークル「亦楽同人会」で、教材解釈と発問のプランを考えた。「亦楽同人会」は国語の文学作品を中心に、教材解釈と授業実践を追求してきたサークルである。

今回のレポートに当たって、私達はまず教材解釈に時間をかけて行った。例えば、ごんが兵十と加助の話の聞くために「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました」の文の解釈では、「ふみふみ」だから一つ一つ重く踏んで行ったんだという意見と、ゆれながら動いていく兵十のかげぼうしのかげにかくれるよ

うにちよこちよこついでいくごん、という二つの意見に分かれた。イメージとしては全く対照的であり、話し合いも白熱したが、今までのごんの性格を考えると、後者のイメージという解釈になった。この解釈から、「ごんは兵十のかげと遊んでいるみたい」「歩いて動いているから、かげに入ってはすぐに月の光に照らされる。見つかるはずだから、またすぐにかげの中に入る」「話を聞きたいためにこっそり近づき、兵十のかげに入ったり出たりしている」というようなイメージを子どもたちに持たせたいのである。そのために、どんな発問がいいのかを検討して

きた。

私達は「なぜ?」「どうして?」という発問をできるだけ使わず、使うとしても極めて限定的な場面で使うことを確認した。子どもたちに文学作品をまづ絵でイメージさせたいためである。その場面場面を絵でしっかりとイメージできれば、登場人物の心情も読み取ることができるはずである。

132 その明くる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。133 兵十は、物置でなわをなっていました。134 それで、ごんは、うちのうら口から、こっそり中へ入りました。135 そのとき兵十は、ふと顔を上げました。136 と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。137 こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

### 〈解釈〉

132 「その明くる日も」ごんはくりを持って、兵十のうちへ出かけた。前の晩「つまらないな」や「引き合わないなあ」と思っていたのだが、それでも兵十のうちに来ると。「引き合わないなあ」と思っても、「まっ、それもしょうがないか」と考えたんだろう。うなぎを盗んだため（ごんはいたずらだったが）兵十の前には姿を見せられないごん。それでも、兵十のために何かしてあげたいと今日もやってきた。

133・134 前の晩に「く引き合わないなあ」と思っていたごんは、それでもくりをやりたくて兵十のう

ちに出かけていく。いつもは物置におくのだが、あいに今日は物置で兵十がなわをなっていたので、しかたなく、うちのうら口から、こっそり中へ入った。

135 137 なわをなっていた兵十が何気なく顔をあげると「きつねがうちの中へ入ったではありませんか」反語的なたずね文で強い感情を表している。

「あの時のぬすつときつねだ！」兵十の胸にいかががむらむらとわき上がってくる。「やがった」「こんぎつねめが」から兵十のいかりが普通ではない怒りであることを伝えたい。

「くしやがる」：動詞の連用形につけ、相手や他人の動作をぞんざいに言ったり、ののしりや卑しめたりする意に用いる。

「くめ」：ものの名に添えて見下げていう語。また、この場面では物置と母屋の位置関係も確認するといふ。兵十は顔を上げると、ごんがうら口の中へ入っていくのを見ることができたことから、うら口と物置が向かい合っている（ずれているかもしれないが）ということを確認したい。

### 〈場面のテーマ〉

「く引き合わないなあ」と思いながらも兵十のためにくりを運んでくるごん。物置でなわをなっている兵十。ふと顔を上げた時に見たものは、うちの中へ入った一匹のきつね。そのときに「こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな」という強い怒りが兵十の胸にわ

き上がってきた。「こないだ」というのは、兵十のおつかあが死ぬ前、兵十がはりきり網で魚をとっていた時からである。つまり、ごんは兵十のおつかあが死んでからずっと兵十を見ているが、兵十はあの手でうなぎを盗まれて以来である。

### 〈発問と予想される流れ〉

T 「その明るる日」というのは、どういう日の翌日ですか？

C 加助と兵十の話を聞いた翌日。

C くりやまつたけの送り主を加助は神様、たと言ひ、兵

十も納得したことを聞いた翌日。

T 「明るる日も」いつもと同じでしたか？

C いつもと同じにくりを持って行った。

T いつもはくりをどこに置いておくのですか？

C 物置

T 今日はどうしてうちのうら口へ置いたのですか？

C 物置で兵十がなわをなっていたから。

T ここで、物置とうら口の位置を確かめよう。（板書）

T 135の文で「く入ったではありませんか」は、兵十が驚いているんだね。（反語的なたずね文の場合は強い感情を表すことを前もって指導しておく）どんなことに驚いているんだろう？

C きつねがうちに入ったことに。

T そうだね。そして次の文の「ぬすみやがった」「こんぎつねめが」の言葉から、兵十のどんな気持ちが分か

りますか？

C 憎んでいる。

C 怒りがむらむらとわいてくる。

C ゆるさないぞ。

T 兵十の胸に怒りがむらむらとわいてきた。その怒りは普通ではない、ものすごい怒りなんだね。

138 「ようし」 139 兵十は立ち上がって、なやにかけてある火なわじゅうを取って、火薬をつめました。140 そして、足音をしのばせて近づいて、今、戸口から出ようとするごんを、ドンとうちました。141 ごんは、ばたりとたおれま

### 〈解釈〉

兵十の怒りの次にわいた決心は、ごんを殺すことであつた。決心すると動作ははやいものである。撃ち殺すという目的を達成するためには、できるだけ敏速に、静かに準備をしなければならぬ。139の文では「立ち上がって」「火なわじゅうをとって」「火薬をつめました」の3つの動作を一文で書いてあり、それだけ速く行なったのであろう。そして140「足音をしのばせて」では、相手にさとられないように静かに近づき、ごんを撃つたのである。兵十の目的は達成され、ごんはばたりと倒れた。

### 〈場面のテーマ〉

135の文から視点が兵十になっている。つまり物置でなわをなっている兵十がきつねに気がつき、撃ち殺そうとする様子と、それが達成したことを、兵十の側から見なければならぬ。当然、ごんがばたりと倒れた時には、兵十は「よし、やったぞ」と喜んだことだろう。

### 〈発問と予想される流れ〉

T 「ようし」は強い決心を表しています。何を決心したのかな？

C ごんを撃ち殺すことを。

T 「撃ち殺す」ために兵十はどんなことをしましたか？

C 火なわじゅうを取った。

C 火薬をつめた。

C 足音をしのばせて近寄った。

T 「立ち上がって」「取って」「つめた」この3つの動きはどうだろう？

C 速い。

C 速く火なわじゅうを用意しないと、逃げられてしまう。

T そうだね。この3つの動きは速いんだ。じゃあ、その後の「足音をしのばせて近寄った」は、速いのかな？

C 静かに、ごんに気付かれないように。

C 確実に撃てる距離まで近づかれないように行く。

T そうすると静かにゆつくりだ。そして戸口から出ようとするごんを撃ったんだ。ごんはどうなりまし

か？

C ばたりと倒れました。

T この時、兵十はどう思いましたか？

C やったぞ。

C あのうなぎをぬすみやがったためすつときつねめ。ようやくしかえしができた。

C これで悪いきつねもいなくなった。

142 兵十はかけよってきました。143 うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが目につきました。144 「おや」と、兵十はびつくりして、ごんに目を落としました。145 「ごん、おまえだったのか、いつも、くりをくれ

たのは」146 ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。147 兵十は火なわじゅうをばたりと取り落としました。148 青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。

### 〈解釈〉

142 前から問題になっている文である。今までの視点で兵十であったのに対して、この文の視点はごんである。しかし、ごんの視点であれば「兵十は」よりも「兵十が」の方が自然ではなからうか。もし、兵十の視点であれば「兵十はかけよっていきました」となる。なぜ、この文だけごんの視点で書かれているのか。やはり、ごんの気持ちの表れなのか。ただ、兵十はごんに近づいたというよりも家の中の様子を早く知りたいために近づいたのである。物置とら口の間に（あるいはうら口のその場所かもしれない）ごんは倒れている。兵十は最初ごんには目もくれず、うちの中を見た。どんないたずらをされたのだろうと、心配で。しかし、兵十の目に入ったものはきちんと固めて置かれてあるくりであった。「おや」は思いがけないことに出会ったときに出る言葉で、兵十はびつくりしてごんに目をうつした。その時には、兵十はすっかり事情をのみ込んでいたに違いない。くり、まつたけとごんがつながったから、145の「ごん、おまえだったのか、いつも、くりをくれたのは」という言葉が出たのである。この文はたずね文ではあるが、ごんに聞いているというものでもない。自身自身に言い聞かせている文のようだ。「そうか、そうか、ごん、お前だったんだね」という強い確認、あ

るいは後悔の念。もう、目もあけることができないごんはその言葉を聞いて、うなずくだけだった。「ようやくわかってくれたんだね兵十」とでも言うように。そのぐったりとした姿を見て思わず火なわじゅうを落としてしまう兵十。「俺はなんということをしてしまったのか」兵十は火なわじゅうを落としたことも分らないほど、頭が混乱しているのかもしれない。148の「青いけむり」「細く出ている」ということは何を象徴しているのだろうか。ごんと兵十は死をもつてようやく分かり合えることができた、ということか。悲劇の象徴か。

### 〈場面のテーマ〉

兵十はかけよってきたのだが、それはうちの中を確かめるためであり、ごんの身を案じたわけではない。ただ、この文の「かけよってきた」という部分の視点がごんたということは、確認する必要がある。その後、うちの中を見てからの兵十の後悔とごんのうなずきの意味を考える。

兵十の後悔とは、自分のためにくりやまつたけを持ってきてくれたごんを、自分自身の手で殺してしまった、ということ。自分自身の行為に対しての恐ろしさ。兵十の「ごん、おまえだったのか、いつも、くりをくれたのは」の言葉にぐったりと目をつぶったまま、うなずくごん。ごんのうなずきは「ようやく分かってくれたんだね」とでもいうように、ごんの死によって、分かり合えた二人。

### 〈発問と予想される流れ〉

T 兵十は一番初めに何を見たかったですか？  
C うちの中を見るため、どんないたずらをされたのか

を確かめるため。(ごんの様子を見るためでないことを確認する。)

T 兵十が見たものは何でしたか？

C 固めて置いてあるくり

T このくりを見て兵十はどうしましたか？

C びっくりしてごんに目を落とした。

T 「おや」も「びっくりも」予想外のことが起きた時にとる行動です。何が予想外だったのかな？

C うちの中は何もいたずらされていなかったから。

C うちの中を見ると、いたずらされてないどころか、くりが置いてあったから。

C くりを誰が置いていくのか不思議だったのが、その正体が分かったから。

T そして兵十は何と言ったの？

C 「ごん、おまえだったのか、いつも、くりをくれたのは」

T この文はごんにたずねていますか？

C たずねていない。

C 自分に言い聞かせている。

C そうか、そうか、毎日くりやまつたけを持ってきてくれたのは、おまえだったんだね。

C そんな、おまえをおれはうつてしまった。

T そんな兵十に対して今度はごんについて調べてみよう。142の文でかけよってきたのは兵十でしたね。だれ

にかけよってきたんですか？

C ごんに。

T ごんは兵十が見えているの？

C 見えていない。

C 見えなくても近寄ってくるのを感じた。

C 足音を感じた。

T そうすると142の文は、ごんの視点で書かれているん

です。もう少しふみこんで、ごんの気持ちは「かけよってくる」か「かけよってきてくれる」か？ どちらかな？

C かけよってきてくれる。

T そうだね。そして今、「ごん、おまえだったのか、いつもくりをくれたのは」という兵十の言葉を聞いて、

ごんはうなずいたんだ。どんなことをごんは思っているのか？

C ようやく、わかってくれたんだね。

C わかってくれればいんだよ。

C もう少し、前にわかっていたら、友だちにもなれたのにね。

T 兵十はごんがうなずいたのを見て、火なわじゅうを

ぱたりと落としたんだ。兵十は火なわじゅうを落としたことをわかっているのかな？

C 分かっている。それだけごんのことを思っている。

C こんなに自分のことを思ってくれていたごんを、おれは撃ち殺してしまった。

C おれは、何ということをしてしまったんだ。

T 最後の文です。「けむり」「細く」「出ていきました」から、

やがてどうなるんだろう？

C 消える。

### 「く」講座で話されたこと

「解釈と発問」についていくつかの質問が出たが、この報告をもとにして、場面ごとのごんの性格や行動の変化、そして心情面をみんなで自由に話し合った。

ごんの性格については、ちよつとしたことにも反応してしまう性格ということがあげられる。初めか

らいたずらをしようとか、人を困らせて面白がついていうことではなく、興味・関心のあることについてやってしまい、その結果、人を困らせてしまったということである。兵十のはりきりあみ事件やいわしの投げ込み事件などはその顕著な例である。学習会では、ごんは光るものとか、きらきらしたものにすぐに反応するのではないかという意見が出された。なるほど、そういった印象の強いものに対して、すぐに反応するという性格は、彼岸花に見とれたり、まつ虫の声に耳をすましたりするごんの姿が浮かんでくる。

文学作品の読みはいろいろな方法があるが、今の学習指導要領の中での指導では、子どもたちに十分に読み取る力をつけられないどころか、何をつかませたいのかが分からない。今回の学習会のように、分からないなりにみんな話し合い、その中でごんの性格や場面のイメージを自分なりにつかんでいくことがとても大切なことである。そこで、自分で納得したことや発見したことを、自分の言葉で子どもたちと一緒に考えていくことが教師の仕事だと思

(古川五小)



# 英語 中学1年での実践

## —小学校とのつながり—

桑原孝

最近、日本語を大切にしないで英語をイケイケ・ドンドン…という風潮を感じます。言い過ぎでしょうか？ 母語は人の思考をつくりあげていくものです。このことをないがしろにして、目に見えることだけに力を注ぎ込むというのは、日本の行く末を案じます。物事の本質を見抜く力を誰もがつけてほしいと強く感じます。

子どもたちには、将来、生活していく中で、物事・出来事を正しく捉え、自分の進むべき・生きるべき道をしっかりと歩んでいくことができる人になってほしいと願います。彼らがそうなるために欠かせないことの一つに、人同士のコミュニケーション力を豊かにしてやる必要があります。それにもう一つ、思考をするための言葉の能力を高めてやることです。専門的には、「内言」とでも言うのでしょうか。これが弱いと人は考えが浅くなります。何かを想像することも貧弱になるでしょう。これを豊かにするのは母語力です。外国語科の教員である私の仕事は、子どもたちに、コミュニケーション力と母語力をつけてやることだと考えています。中学1年では、この二つの力の土台づくりを行います。そこでの欠かせないことは、小学校で習得してくる日本語の力です。この力を土台に中学で外国語を本格的に学び始め、母語と外国語、互いが互いを映す鏡の役割を果たしながら、また、時には互いに相乗効果を出しながら、螺旋的に言葉の力を高めてい

くこととなります。この辺りのことを具体的に述べていきます。

### 1 文字と発音

小学校でのローマ字学習は、一般的に行われている、日本語の文字をローマ字で表す機械的な一対一対応（キーボード入力をするためと言ったら過言でしょうか？）の表記法ではなく、音と結びついた音声法で行ってほしいと考えます。ローマ字学習は、子どもたちが既に経験的に（生活的概念として）もっている日本語を一般化・客観化（科学的な概念に）するものでなければなりません。この過程は、言い換えれば、生活で使っている具体である日本語を抽象化することです。

実際の授業では、日本語の文字と音声との関係を体系化することになります。日本語のもつ音声を、聴音（聞こえ）と調音（つくり）のふたつの面から体系的に捉えます。その順序は、唇で調音する「はれつ音」の「ば行」や「鼻音」の「ま行」などから始まります。なぜなら、これらの音は、聞こえ（聴音的特徴）がはっきりしているだけでなく、唇の閉じ・開きもはっきり視覚的に捉えやすいからです。終わりは、ねじれた音節（「しや」「しゅ」「しょ」など）や「つまる音」（「かつば」「おっと」など）です。ここまでの一連の学習の結果、日本語の文字は音節文字で、ローマ字は単音文字（ば = ba, 「ば」が音節文字で、ba がそれぞれ単音文字）だということがわかります。音節から取り出した単音を一つ一つその聴音と調音について学習し、その単音を表す文字と合わせていきます。こうして音と文字が結びつき、一体となり、それを体系化させます。このようにして、日本語について体系的に学習した子どもたちは、中学に入学し、英語の文字と発音の学習を積み重ねます。（このような小中連携の仕方が理想です。実際はそうなっていません。従って、今述べた小学校でのローマ字学習の内容をダイジェストにして中学1年の授業に組み込んでいるのが現状です。）日本語と英語で

共通すると言ってよい(細かく見ると違いますか)音には、例えば、はれつ音 p, t, k (無声) / b, d, g (有聲), まさつ音 s, はれつまさつ音 ts, ds, 鼻音 m, n などがありますから、小学校でのローマ字学習の効果が大いに期待できます。そして、日本語にしかない音、英語にしかない音についても子どもたちは自覚し、よりいっそう互いの言語のことが科学的概念として高められます。このようなローマ字学習を小学校でやるのとやらないのでは、その後の子ども日本語と英語の発達に雲泥の差が出ることは明らかです。中1での「文字と発音」の学習では、はれつ音、鼻音、まさつ音と進み、最後は流音 (l, r) という過程を踏みます。流音は日本語にはない英語特有の音です。一連の学習の始めから、調音について、舌の位置、口の開く大きさ、呼気の出どころ(口か鼻か)について意図的に進めていきます。最後の流音まで来て、子どもが意識してこれら調音の3点について自分で調節し、流音をつくり出すことがゴールです。発音の学習をするまでは、音のつくり方など考えたことがなかった子どもたちがここまでできるようになります。中学でこの授業を受けなければ、一生涯日本語の、または英語の音のことなど意識しないこととなります。

小学校でのローマ字学習が音声法で行われていれば、中学での始めの段階である「はれつ音」や「鼻音」、「まさつ音」には、それほど時間をかけなくて済みます。「流音」に多くの時間を割くことができたり、つぎの段階の「文の組立」に早く進むことができます。小学校のローマ字学習で、日本語の音声体系を学習することは、英語の学習に多大な効果をあたえます。このようにして「文字と発音」の学習が済むと、子どもたちは、英語の文字を音にすることが自分でできるようになります。発音に自信がなければ、辞書を引き、発音記号を見て自分で確認します。「文字と発音」の学習と平行して、辞書引きの学習も行います。辞書は、発音表記にカタカナを使っているものは避け、発音記号のみのものを子どもたちには薦めてい

ます。また、辞書指導は、数ある意味の中から適切な意味を選ぶことができるよう、この後に続く「文の組立」の中でも行います。)この後は、一つの単語についてアクセントを意識して発音すること(単語レベル)、文について英語特有のリズムである強弱を意識して音読すること(文レベル)、同じく文について、段落を単位に話の流れを考えてどの単語にストレスを置くかを意識して音読すること(段落レベル)へと進めていきます。それぞれのレベルでの音読の習得度合いの高まりとともに、聞き取る力もついてきます。ここまでの学習は中学1年1学期、ないしは、2学期始めまでです。

## 2 文の組立

2学期には「文の組立」に入ります。まず、中核を成す「主語・述語」について。ここでは、現実の世界を話し手が文で切り取るとき、「もの」と「ものの属性」という観点をもつことが貫かれます。話し手が文を組み立てるとき、「もの」を表すのを主語、「ものの属性」を表すのが述語です。話から文を取り出し、取り出した文をつくる単語について詳しく学習した後、述語の学習に入ります。ここでは、「ものの属性」を表すのに3種類(うごき、状態・性質、種類)あること、そして、もののおごきを表す述語は動詞だけできていて(beはつけず)、状態・性質と種類を表す述語はどちらにも繋ぎ動詞(linking verb)であるbeをつけることを学習します。ここまですんだところで、日本語を英語に直させます。子どもたちが生まれて初めて取り組む英作文です。暗記した英文を使つての英作文ではありません。文の組立を考えた日本語から英語への翻訳です。問題の一つにこんなものがあります。「エレンは学生です。とても親切です。夏、泳ぎます。」という問題です。「エレンは学生です。」については、「Ellen is a student.」と、ほとんどの子どもができます。しかし、「とても親切です。」については「very kind.」, 「夏、泳ぎます。」については「Summer swims.」とする子ども

が多く出ます。しかし、それが親切なのか、それが泳ぐのか、という発問をすると、「She is very kind.」, 「She swims in summer.」と、「もの」と「ものの属性」という観点から、主語を補い、述語のしくみを考え、英文をつくることができます。子どもたちは、ああ、なるほど、そういうことかと、皆一様に目を輝かせ、次の問題を要求してきます。子どもたちが自立して学習を始める第一歩を踏み出す場面です。ここまで来てやっと、英語を自由に使いこなせるようになるための第一歩です。これをこの後に続く学習で、子どもたちが自動化できるところまで伸ばしてやるわけです。基本文を数多く暗記すればとか、英語のシャワーを浴びせればとか、そんなことで英語ができるようにはなりません。

次は「人称」です。日本語と英語の違いが浮き彫りになります。また、ここでは、話の世界のことからを、「話し手」, 「話し相手」, 「話し手・話し相手以外」の三者の立場から切り取ることを学習します。これは、子どもたちが、それまで話の世界が自分を中心に据えてきたことが、「話し手」を中心とする座標の上を広げて考えることとなります。子どもたちにとつては、現実の世界を文で切り取るとき、できごとを客観視できるようになる場面です。

教材「主語・述語」の最終段階では、絵を見て、最低三つの文で話をつくらせます。機械的に三つではありません。絵に描いてある「もの」について、その「動きの属性」, 「状態・性質の属性」, 「種類の属性」の三つです。「~つの文で書きなさい。」という数だけを指定した問題をよく目にします。表が待っています。自分のつくった話を「話し手・話し相手以外」のこと(第三人称)として口頭で発表します。話し相手である他の子どもたちは、それを聞き、同じ話について主語の立場を変えて第一人称や第二人称に直して口頭で発表します。その後、その話について、生徒同士が英問英答を行

います。一つの話を題材に英語で互いに話し合うのです。会話によるコミュニケーションの第一歩です。コミュニケーション活動ができるようになるためには、このような緻密な手だてが必要です。これをしないで、現行の会話中心の授業だけでは、自分の伝えたいことはいつになっても英語では言えません。

教材「主語・述語」の後には、「文の二次的な成分」が続きます。主語・述語を一次的な成分としたときの主語・述語以外の文の部分の学習です。ここでは、文の組立について、「主語・述語」の時よりも豊かに英語の文が自分でつくられるようになることを目指します。例えば、「Tom eats.」という文は、これだけでは文として成り立ちません(eatを「食事する」ではなく、「食べる」と見たとき)。トムが「食べるもの」が必要です。「Tom goes.」, この文もだめです。今度はトムの「行く先」が必要です。「食べるもの」も「行く先」もどちらも「補い=補足語」です。しかし、同じ補足語でも、食べるものは「もの」で、行く先は「場所」です。「食べるもの」をapple, 「行く先」をSeattleとします。「もの」なら、補足語appleに前置詞はつけませんが、「場所」のSeattleには前置詞toをつけてSeattleとしなければなりません。それぞれ、Tom eats an apple. / Tom goes to Seattle. とならなければなりません。これで文の骨格はできあがりです。骨格に肉をつけていきます。いつリンゴを食べるのか、なら、「時の状況語」が入ります。状況語ですから、Tom eats an apple.の前でも後ろでもよいのです。しかし、骨格である、主語・述語・補足語(Tom eats an apple)という順番を変えることはできません。「毎朝」のできごとでならEvery morning Tom eats an apple (every morning).です。これに、さらに肉をつけ、場所の状況語「台所で」を入れます。やはり状況語ですから、骨格Tom eats an appleの前か後に入ります。(to Seattleと同じ「場所」ですが、to Seattleは補足語ですから、述語の後ろになります。)こ

うして、Every morning in the kitchen Tom eats an apple (in the kitchen)(every morning). という文ができあがります。さらに、規定語、修飾語、独立語を学び、二次的な成分の学習を終えます。

中1で、このような「文の組立」を学習する際、小学校でどのような学習が行われていれば、子どもたちの言葉についての力を豊かにすることができるのでしょうか？ 小学校でのそのような日本語教育のカリキュラムは、教科研国語部会の方々がつくられています。テキスト「にっぽんごシリーズ」では、単語を取り立て、名詞・形容詞・動詞の学習が始まり、その単語を組み合わせて文をつくる学習へと続きます。日常の生活経験で子どもたちが使ってきた日本語を科学的に体系づけていくことの始まりです。ここでは、一見難しいことをとてもわかりやすく学べるよう学習過程が組まれています。まさに中学英語の学習と重なります。小学校の国語の授業でこれらを学習すれば、英語の学習にどんなに効果を上げることが。日本語と英語のしくみについてそれぞれをきちんと体系的に学習し、両者の類似点・相違点が浮き彫りにされ、相乗効果でさらに互いがよくわかるようになります。国語と英語のカリキュラムがつながること、日本人が日本人らしくきちんとした日本語の使い手になるのでしょうか。外国語もよくできるようになるはずです。

### 3 読み取り (言語活動)

「文字と発音」「文の組立」で学習してきたことを使い、中学1年の最後に説明文を読みます。例えば、SPIDERS や BUTTERFLIES, FRUITS, などの説明文です。クモや蝶の生態、果物について私たち人間との関わりなどを扱ったものです。これらは、外国語学習者用に書き下ろされた原書です。教科書とは違い、単語の使用や文体が生き生きしています。また、文のつながりや段落のつくりには、読み手を引き込もうと、作者の工夫がな

されています。現行の教科書と比べると、質・量ともに違うことがはっきりとわかります。ここでつけた力は、中学2・3年での物語の読み取り (イギリスの作家、ロアルド・ダールなどの作品を書き下ろしてない原書)へとつながっていきます。ここまで学習してくると、卒業時の子どもたちは、勉強の仕方・道筋を見つけ、長い文にも途中で諦めることはせず、自分で辞書を引き、後ろから前に戻ったりせず、頭から、しかも、次にくる語を予測しながら読んでいく力をつけます。原書が読める力をつけて彼らを卒業させてやることができます。読み取りの力は、聞くこと・書くこと・話すこと、すべての力の基盤です。このごろの小学校での丁寧な読み取りは、話す活動に押しやられてしまったと聞きます。小学校での読み取りがきちんとなされ、英語による読み取りとの連携がなされることを希望します。

最後になりますが、何を言いたかったかという点、小学校できちんと日本語を教え、その上で外国語を教えるべきだということです。

(塩竈市立第三中学校)



# 「すばる教育研究所」があった

## ● はじめに

宮城に、「すばる教育研究所」という小さな私設の教育研究所があった。1977年に創設、2001年に閉所というきわめて短命であったが……。

設立のきっかけは、宮城県教職員組合が1976年2月の臨時大会で提案した教育研究所設立案が否決されたことにある。

当時、教職員組合教育文化部担当執行委員であった春日辰夫は、「教職員組合立教育研究所」設立構想を、長年指導を受けてきた大村榮に話すと、大村はその設立をたいへん喜んだ。しかし、設立提案は、臨時大会で否決という結果になった。

後日、春日から報告を受けた大村は、「継続審議ということでも、設立にはしばらく時間が必要だろうねえ」といかにも残念そうであった。

そう言いながらも大村は、その時突然思いついたことと思うが、言葉を継いで、「じゃあ、私た

ちで研究所を創りましょう！」と言うのだった。

その頃、大村は、73年3月に木町通小学校長を退職。大村の退職を待っていたかのように、4月から県教育委員会は、大村を〈宮城県教育百年史〉の編集主任（79年3月まで）とし、大村は在職中とはまた違った多忙な日をおくっていた。その大村がすんなりと「私たちが教育研究所を創ろう」と言ったのだ。



## ● 「すばる」の出發

それからの大村の動きはすばやかだった。かつての宮城県教育研究所（後に宮城県教育研修センターと改組、その任務は大きく変わった）所員時代の同僚を中心に声がけし、あつという間に中心メンバーがそろった。もちろん「私設」ということの気楽さはあつたろう。

所名は「すばる教育研究所」、事務所は大村宅とし、りっぱなケヤキに菊地新の揮毫で「すばる教育研究所」名の標示が門柱に掲げられた。機関誌「教育すばる」も発行することになった。

三役は、所長・大村榮、副所長・宮崎典男、菊地新事務局長・北村秀雄（きた出版初代社長）が決まった。次は規約の一部である。

### すばる教育研究所規約（抄）

二、目的 この研究所はひとりひとりの子どもを生かすほんとうの教育の在り方を探求し、父母、教師をはじめ広く教育にかかわる人びとの経験と研究とを交流し、その積みあげと深化を通して、相互の成長充実を期し地域教育の向上をはかる。

三、組織 この研究所は、つぎのものによって構成される。

- 1 所友 この研究所の目的に賛同し、その事業に参加協力する。
- 2 所員 所友のうち、特に設定した主題にもつぎ研究活動を積極的に推進する。

- 3 賛助所友 この研究所の目的に賛同し、その研究活動を援助する。
- 五、経理 この研究所の経理はつぎによる。
  - 1 活動のための経費は、構成員の負担、ならびに寄附金による。
  - 七、事業 この研究所は、その目的達成のため、つぎの事業をおこなう。
    - 1 研究報告会発表会、研究会などの開催
    - 2 学習会、講習会の開催
    - 3 機関誌、実践記録、研究記録の刊行
    - 4 地域の教育史、教育遺産などに関する資料の発掘、刊行
    - 5 教育相談など

機関誌「教育すばる」創刊号は、設立総会に先立って、総会案内をかねて早々に発行され、かくして、77年9月15日「すばる教育研究所創立総会並びに記念発表会」の運びとなった。



### ● 「すばる」初期の日常活動

「すばる」は、実際にどんな活動をしたのであるうか。

まず本部事務局を中心とした動きをみてみよう。機関誌「教育すばる」にその足跡がのこっているが、紙数の関係でその一部になる。

すばるの歩み（その1）「教育すばる」2号から

【1977年】

◆9月15日（木）（敬老の日）創立総会と記念研究発表会（常盤木学園会議室）

午前9時～午後3時30分

参会者・賛助所友7名、所友131名（うち所員34名）、その他25名・計163名

◆10月8日（土）

第1回運営委員会（仙台ユネスコ会館）

午後2時～4時

◆10月10日（月）

第1回運営委員会の協議結果を要約し、「すばる通信」を発送する。

◆10月19日（水）きょうとあすの教育を考える「母親のためのつどい」を開催（仙台ユネスコ会館）

午後2時～4時

講師―所員・八島正秋「算数のわかる道すじ」

所長・大村榮「心のゆたかさを育てる」

◆11月5日（土）

第1回所員研究集会（出席所員12名、研究テ―

へんしゅうし）

去年の9月の第2回総会の日、国分一太郎先生をお招きし、復刻版『国語教育研究』の出版記念を兼ねた講演をいただきました。

その講演要旨を誌上に報告したいと願いながら、録音テープから原稿におこす仕事に手間どり、このほぐ、ようやくできあがったのでこの号の巻頭にかかげました。

「こんな授業が子どもをだめにする」という論文を連載することにし、その第1回に梶山正人氏の音楽指導の原稿をいただくことができました。感謝しています。どうぞ、これについて各教科についての投稿をお待ちします。

8月末の金曜日の午後、つれだった小学生がふたり、なだらかな坂道を歩いてきて、「ここ、なんとか研究所って書いてあるぞ」「ええっ、研究所がやー」、そんな会話を交わしながら、通りすぎて行きました。

「ここ」「すばる教育研究所」の看板を出してから、間もなく満2年になります。近くの小学生が、その存在をおぼえてくれたらしいことはありがたいが、こんな会話を聞くたびにちょっと後ろめたい感じもします。

「ああ、研究所だよ、建物は小さくてよね」「そう胸を張って答えられるよう、いっそうの「支援」の協力をお願いします。」

（「教育」2016年11月1979年9月号）

マとその研究の進め方について懇談)

◆11月12日(土)

第1回すばる土曜会(ユネスコ会館)

午後1時〜2時「教育相談」担当―大村所長

午後2時〜4時「講演と懇談」

講師―賛助所友・村田幸造

「宮城県の児童文化運動とスズキヘキ」

所員・泉俊彌

「児童生徒の理科学習のつまづき」

◆12月10日(土)

第2回すばる土曜会(ユネスコ会館)

午後1時〜2時「教育相談」担当―大村所長

午後2時〜4時「講演と懇談」

講師―副所長・菊地新「子どもの学習について」

◆1978年1月14日(土)

第3回すばる土曜会(ユネスコ会館)

午後2時〜4時「講演と懇談」

講師―所長・大村榮「おとなになるということ」

◆1月30日(日)「教育すばる」第2号発行

1月末現在、賛助所友16名、所友225名(うち所員51名)計241名

すばるの歩み(その3)「教育すばる」4号から

【1978年】

◆8月12日(土)

すばる土曜会(ユネスコ会館)午後2〜4時

夏休みに入ったので、きょうこそ、多くの人びとに会えるかと思っていたら、予期に反して相変ら

ず出席が少ない。この会館の前の事務局長だった賛助所友の村田幸造さんにお世話してもらって、謄写印刷に時間をつぶす。

なお、8月中は、さきの宮城県沖地震のためあつて遅れている復刻刊行の仕事に追いまわされて、事務局はてんでこまいである。とくに、別冊「北方の父」をガリ版印刷から活版に組みなおしたため、そのレイアウトや校正などで、地震の被害も片づかぬ事務局の2階で、宮崎・菊地・北村・大村がなんども会合をかさねた。

◆9月9日(土)

15日に、復刻版が刷りあがつてくるというので、ケースのデザインや発送・配本の段どりなどのため、すばる土曜会を、この月は休むこととする。

去年の9月15日に創立総会をして、間もなく一周年を迎えようとしている。できれば、去年にならつて、この15日に第2回総会を開きたいところだけれど、ことは、復刻の配本のほぼ終わったところで、刊行記念会とあわせて開催することにす。会場をお願いした常盤木学園が、地震の被害の修復で学園祭を延期しているとかちあい、会場を別にするにことに。

◆10月8日(日)

午後3時から晩翠草堂を借りて、「国語教育研究」復刻を終えての座談会を開く。メンバーは、鈴木道太・佐々木正・村田幸造・富田博・宮崎典男・菊地新・大村榮、一切の世話ならびに、録音とカメラ役は北村秀雄。みんな、かくしきれない喜び

に感激し、話はずんどどまるところを知らない。復刻で仕事が終わったのではなく、ここから新しい仕事が始まるのだという思い。

◆10月14日(土)

すばる土曜会(ユネスコ会館)、さきに所員の皆さんに「創立一周年を迎えて思うこと、および、さしせまってお願ひ一つ」——というプリントをあげて、この日を所員を中心にする集りに予定していた。ところが、二、三の方から欠席の連絡。相変らず出席が悪い。宮崎典男さん、いわく「できないことはできないのだから、別に方法を考えよう」。

## ● すばる合宿ゼミナール

「すばる」は、発足時から年1回の合宿ゼミナールをもつことを企画し、第1回は1980年2月に白石小原温泉を会場にもつた。その日の案内の一部を機関誌「教育すばる」7号から抜き出す。

### ○第1回「すばる合宿ゼミ」案内

教育現場の実践と研究を交流し、同人相互の理解と親睦を深める。

一、日時(一泊二日)と日程

2月9日(土)開講(午後3時)

講演、分科会ごとの研究協議、交歓懇談

2月10日(日)研究協議、閉講(午前11時)

二、会場 白石市小原温泉いずみやホテル

三、経費 6000円(宿泊資料その他)

#### 四、分科会

第1分科会 学級づくりと学級指導

第2分科会 国語教育の内容と方法

第3分科会 地域に根ざす社会科教育

すばる合宿ゼミは、第5回まで小原会場、第6回は仙台市内の県婦人会館、第7回は仙台市茂庭荘、第8回は柴田町施設太陽の村、「太陽の村」会場は1987年1月で、それまで休むことなく年1回つづいてきたが、ここで切れてしまった。

なぜか、それは、後で紹介する大村の「創立20周年を迎えて」（1997年）が、そのすべてを語るようになる。

「すばる合宿ゼミナール」はどんなものだったのだろうか。「教育実践の総合的研究」「すべての子らに学ぶ喜びと感動を」「いま、学校に問われているもの」「草の根の教育改革を進めるには」など、そのつど研究主題は違っていても、合宿ゼミの持ち方に大きな違いはなかった。

第3回（1982年1月）終了後、「教育すばる」15号は「合宿ゼミを終えて」と、次のように報告をする。

\*合宿ゼミを終えて

##### ① 刈田サークルの支援

ことしも、去る1月30日（土）と31日（日）の両日、白石市小原を会場に総会と合宿ゼミをセットにして集会を開くことができた。ことしも、刈

田サークルのかたがたの有難い支援があつて、予想以上に盛会だった。

昨年までは、2月11日の前後を選んで実施してきたが、ことしは東六郷小学校の宿泊研究会がその時期を選んだので、その共催団体でもある当方の計画を半月近く繰りあげることになった。なにせ、寒さのきびしい1月末のことで参加者が少ないのではと心配されたが、結果は65名（うち、宿泊会員41名）と昨年を上廻った。参加費1000円、宿泊費6000円を、全員が自弁の参加だから、熱心のほどに頭がさがる。心配していた天気も、二日とも晴天、真冬にしてはおだやかな暖かさであった。

##### ② 校長も「磁石」の授業

会場をひき受けてくれた白石市立小原小学校は、低・中・高学年それぞれに授業実践を提供してくれた。

11時から11時45分までが、1年生の作文の授業。教室に2匹の兎を持ちこんでの栗原昇教諭の指導である。栗原さんについては、宮城作文の会の指導的メンバーとして、その実践に定評がある。この日の兎の観察指導の実践は、いずれ本誌に掲載予定。ご期待いただきたい。

13時から13時45分までが、3年生の理科の授業。教材は「磁石」で、指導者は安藤正二校長。しかも、この授業は宮城教育大学の中村敏弘教授と安藤校長との共同研究によるものである。

13時45分から14時30分までが、ビデオを使っての6年生の「縄文土器をつくる」の実践報告。指導されたのは、学級担任の鈴木静夫教諭。ビデオは社会科の授業の発展としてこの学級のいわゆる「白わく」の時間に実践した映像記録。その一部は、さきにNHKから全国に放映されている。

この報告をめぐって、出席者からいろいろな感想や意見の交流があつた。中心となった問題は、生活と授業との関連・結合・統一のこと、さらには知的理解や認識とからだや道具を使つての仕事を進める態度、能力とのかかわりなど、豊かな展開が予想される話合いであつたが、残念ながら時間切れとなつた。

ビデオテープを使つて、その実践指導に当つた教師が解説を加えて報告し、総合的に実践を検討する方法を開発するのを感じた。

その中で児童たちの作品や学習成果などもその場に展示し、長期にわたるそのプロジェクトに参加した児童たちや、関係した協力者なども招待し、その感想や意見などをも聞くことにしてはどうか。

##### ③ 夜打ち朝がけの授業検討

栗原さんの授業を中心とする検討会は、会場を小原温泉ホテルいずみやに移して、夜に入って開かれた。

それに関連し、全員で宮崎典男さんの「作文指導の体系」を聴講した。予定した講座と検討懇談

の終ったのは深更であった。聞くところによると、宮崎さんは、近くこの夜の講義を発展させ機関誌『教育国語』に連載する予定とのことである。

なお、安藤さんの授業についての検討会は第2日の午前8時半から小原小学校で開かれた。この授業の共同研究者のひとりでもある宮教大の中村教授が助言をしてくれ、終わりに短い時間ながら総括の意をこめて講演してくださった。

#### ④ 子どもらが生き生きする時

これは、この合宿ゼミの主題であった。この主題のもとに、菊地新さんの約1時間にわたる講演があつて、2日間のスケジュールは終わった。

この講演では、さきに菊地さんが本誌の前号に書いた「小さい学校の大きい成果」にもふれて、「即効の技術に苦心するより、根底となる生活を耕し、生活を充実して、まず楽しい生甲斐を与えることが大切」という信条を根底にして、家庭や学校や地域が子どもたちを育てることを力説した。

たまたま、形骸化した系統・方法を重視するあまりに、児童生徒の内発的な創意や活動を封じ込める愚を慎むべきことを強調したところから、前夜深更まで「作文指導の体系」を論じてやまなかった宮崎さんの所説ときわどいニアミスなどがあつて、閉会寸前に緊張した場面も見られた。

教科と生活と、計画された教師の指導と創意にあふれる児童生徒の学習活動と、一見して対立矛盾相剋するこれらの両極を、家庭で学校で地域社

会で、幼児期・少年少女期・青年期のそれぞれの段階で、各教科・教材・領域の特殊性に即して、どう総合し構造づけ実践するかが、教育研究の避けることのできない問題である。

このたびの合宿ゼミが、その終盤にきて、改めてこの問題をとりあげ、再会を約して別れたことは、それこそかけ替えのない収穫の一つであつた。

### ● 総会と研究会

合宿ゼミナールとは別に、年1回の総会は、いわゆる総会だけで終わることなく、この日の多くの時間は研究会に費やされる日程が組まれた。ここにも、教育研究所としての「すばる」本部事務局の意気込みが感じ取れる。

所長・大村榮は、「教育すばる」17号に創立5周年を迎えて、「ひとすじの流れとなりた」という題で「すばる」への思いを書いており、総会時の研究会の内容・様子も見えらると思ふ。

#### 創立5周年を迎えて

大村 榮

5年前の7月30日(土)のことである。仙台ユネスコ会館の一室を借りて、民間教育研究所を創立しようという準備の相談が進められていた。はじめてここで顔を合わせたという人びともいたが、多くは教育の現場で地味に実践にとりくんでいるか、児童福祉や児童文化で苦勞をかさねているか、あるいは、現職を退いた教師たちであつた。

なにせ、つぎのような趣旨の教育研究所を手づくりで設立しようとしていたのである。

「ひとりひとりの子どもを生かすほんとうの教育の在り方を探求し、父母、教師をはじめ広く教育にかかわる人びとの経験と研究とを交流し、その積みあげと深化を通して、相互の成長充実に期し地域の教育の向上をはかる」

ささやかな、この研究所の名称は、「寄りそつて光を放つこと散開星団の如くありたい」との趣旨から、「すばる」と名づけ、9月15日に創立総会を開くこととした。常盤木学園の集會室で開催された創立総会には、200名近い出席者があつた。この総会で議長をつとめてくれたのは、ありし日の伊藤千代記兄であつた。

記念の研究発表に、「東北の冷害凶作と児童福祉」(筑前甚七)・「地域に根ざした社会科の授業」(佐藤好一郎)・「宮城の児童文化と野口雨情」(遠藤実)・「子どもの成長と教師のしごと」(宮崎典男)・「校長が泣いた話」(菊地新)・「文彦にあてた磐溪の手紙」(大村榮)などがあつて、この研究所の多彩な前途を予告してくれた。

それにしても、おたがいが、いくばくかの資金を出しあつて民間の教育研究所をつくらうという願いが、こうして実現されたという背景には、年を追ひ日を追つて深刻化する教育荒廃の現実と、その対応の貧困さに対する深い憂いがあつたからである。

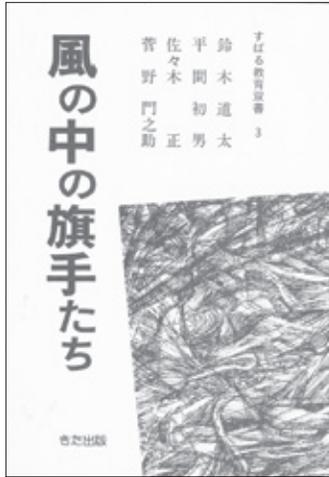
あの日から満5年、わたしたちは、どれだけの

仕事をすることができたか。

さいわいに、所員・所友・賛助所友およそ250名の方々の協力と支援によって、機関誌『教育すばる』は17号を、すばる教育双書は『荒野にめばえる』・『水脈は地下を流れる』・『風の中の旗手たち』と3集を、教育遺産の発掘継承の事業としては『国語教育研究』（6巻23号、付別冊「北方の父」）の完全復刻を世に送った。さらに、冬季の合宿ゼミを白石市小原小学校はじめ刈田サークルの諸友にささえられて回を重ねること3回、そのほかにも、所員・所友を中心に各地で、多様な活動を展開している。

しかし、もちろん、この現状で満足しているわけではない、——とくに、憂慮していたこの国の教育の荒廃は、その病根の深さと様相の広範複雑さを日ごとに露呈している。

いま、5周年を迎えて、「すべての子らに学ぶ喜びと感動を」と訴え、「非行と暴力の根をさ



ぐるう」と呼びかけ、この二つを緊密な関連でとらえる新しい教育研究運動を展開しようとしているのは、緊迫した時代の要請に答えて、教育の荒野にひとすじの流れをひらく決意を固めているからである。

### ● 各地における「すばる」の活動

「すばる」の動きは、本部事務局が企画するものに限らなかつた。各地で、所員の創意とその地の要望をくみとつての動きがみられた。

教育関係者だけで終わることなく、親の集まりがつくられたところもあつた。

#### 地域の集まり 1

ことしに入つて、すばる教育研究所の地域活動が、それぞれ特色ある動きを見せています。

所員の栗原昇さん（福岡小）を事務局長とし、作文教育の実践を中心に月1回の例会を開いている大河原地区例会には、毎回、宮崎典男さんが出席しております。会場は、大河原町の教育会館を使用しています。

白石市の浅野緩子さんのお宅を会場にする「刈田のつどい・国語サークル」は、所員の遠藤惟也さん（白川小）が事務長で、すばるのなかまが多く集まっているとのことでした。

また、遠田郡小牛田町の「授業の会」は、賛助所友の鈴木市郎さん（小牛田ろう学校）を中心に、各教科にわたる実践授業を中心に会合をかさね、

この9月8日（土）の午後には、小牛田ろう学校を会場に、数学「文字と式」中1、国語「俳句」中1の授業研究がおこなわれます。

仙台の「すばる土曜会」は第1・2土曜日の午後2時から4時までの2時間、東六コミュニティセンターを会場に、家庭教育の問題を中心に、父母と教師の教育懇談を重ねています。去る7月には小田原市の和田重正さんの来仙を機会に講演会を開き、8月にはその発展として「子ども

の感情をそだてる」を主題に話しあいました。このほかにも、各地の皆さんがたの活発な活躍ご発展を期待しています。

なお、かねて計画中の「すばる教育双書」の刊行が具体化し、近くその第一集が出版されることとなり、中川正人、太田貞子、佐藤好一郎、遠藤惟也の四氏から、それぞれ力作の原稿が寄せられています。ご期待ください。

#### 地域の集まり 2

#### 小松島地区 母親の会報告

菊地 新

小松島地区のおかあさん方の会が発してから定例の会合も3回目、月1回の集会もどうやら軌道に乗ってきた感じ。場所は小松島好日庵、佐藤町内会長さんの特別の配慮である。若い時、教壇に立った体験をもつ会長さんがにこにこ笑顔で参加していた、たくのも有難い。

あばれはっちゃく

「うちには、小学5、4年の男の子、それに1才の女の子がいます。5年が民夫、4年が行男、それがもう勉強そっちのけ、遊びに夢中、毎日泥んこで洗濯がたいへんです。」

こどもの生活報告を語る鹿野さんの顔は、たいへんなんですよといつてもちつとも困った表情はない。

「それも釣りに夢中で、学校から帰ると鞆をぶんなげて釣り竿をもって駆けだしていくんですよ。」危険な場所じゃないんですよという質問に「釣りの場所へ行ってみました。与兵衛沼の奥の大堤というところで全く危険性はないんですが」クラスの会合でも、あるおかあさんから、魚釣りは危険だから学校で禁止してほしいという発言があったが、鹿野さんは「実際の場所へ行ってほしい、大堤はまったく危険はない」と抗議したという。

「こどもがとつても強情で、いつもうちではおばあちゃんとやり合うんですよ」いつかは遊び疲れの眠り過ぎを叱られて、朝御飯をたべず学校へいったという。

捨て猫を拾ってきたり、かと思うと畑仕事を汗みどろになって手伝ったり、しばらくはこの痛快なあばれはっちゃくの言動報告に爆笑の連続、しかし生き生きと語られるその報告からは、おうちの人々の飾り気のない愛情交流の姿がうかがわれ、しみじみと聴く人々の感動を呼ぶ。素朴に語

る鹿野さんの眼鏡の奥の眼は、子育ての苦勞をむしる喜んでいいるひかりがあった。

ダンナに命令「アナタ行ってみなさい」

「与兵衛沼といえば、あそこでうちの4年坊主、龍というんですが、大きな雷魚3匹もとってきたんですよ」というのは宮内さん。とってきたのはいが買つてやつたばかりの長靴をおいてきたという。思わずカッとなって「行って持って来なさい」と叱つたら、子どもは致し方なく行って来ようとする。夕暮れ、雪も降ってきた。少し心配になった宮内さんは、そばにいるダンナさんに「小さい子をひとりやるつもり、アナタついて行ってみなさいよ」と八つ当たり。しばらくして帰って来たダンナさんいわく、「深い泥の中にギツシりとささつていて、あれじゃとても取れないよ。お前さんもいつてみるといい。」(これまた大笑い)しかし、こう語る宮内さんは家庭教育についてもはっきりした意見を持ち、地域の文庫運動のリーダーという実践者でもある。

だから龍君が兎ばかりか、ねずみを飼ったり、いもりを飼ったり、雀を餌づけしたり、あるいは捨て猫を拾ってきて育て、初めて蚤(ノミ)を知ったという話などにも、愛情深くこれを見守っている母親の姿がはつきりとよみとれて、自ずから深い共感を誘うのである。

高校受験をひかえている中学生の長男も、「大事な時期を灰色で終らせたくない」という宮内さ

んは「自分のことは自分で」と自主的な生活態度を育てることに子育ての焦点をすえて努力しており、当の長男の中学生も、「自分の成長は自分で責任を持つからまかしてくれ」とはつきりと、言い切っているという。

たのしい話し合いの中で

こんな話し合いに笑い声は絶えるということもなく、回を重ねるに従って発言の率直さも目だってくるようである。

・「ひとりっ子だが、どうも遊び相手がない。普通の子であればいいと過大な期待はかけないのだが心配です。」

・「小さな子とは遊ぶが大きな子とは遊ぶことがないんですよ。」

・「母の自分は山奥生まれ、物には恵まれなかったが夢多く育った。それにひきかえ今のわが子には夢がなさすぎる。」

・「勉強は、宿題があればいいやいやながらするけど義務的。テストが悪いと思わずカッとなる。成績も下がってきて心配です。」

・「どうにも宿題を忘れがち、1、2年の時まじめにつけていた日記もつけなくなった。」

・「テレビと漫画に夢中、これでいいのではありませんか。」等々。

さまざまな家庭の、さまざまな心配や実態が率直に話しだされて、話し合いは尽きない。

そこにはむずかしい話、理屈っぽい話はない。

しかし、具体的な話の中に、子どもの遊びの、いや子どもの教育の大切なポイントが、次々と話題にされていく。いわば、子どもの生活の生きた事実から学びとつていく共同学習である。理論から演繹された講話に終らず、生活の事実から帰納される納得にこそ、の意味があるのである。

### 現代っ子の不幸

今の子どもの遊びはどうであろう。都会の子どもは第一、遊び場に恵まれていない。都市公園法による児童公園の設置基準などは遠い未来の夢である。

商業主義にふりまわされている遊びの規格化、模倣化、そして受容強制傾向、低俗文化やギャンブル色の浸透、本や玩具にみられる華美・俗悪・紋切り型のよい主義——どれをとっても問題が多い。共通して言えるその華美とぜいたくと過保護と、そして創造の余地がない受容と定型の押しつけを思うと、まさしく現代っ子は恵まれ過ぎた不幸を背負わされているといつていいではないだろうか。

### あたたかく見守るころ

こうした風潮を下地にしているからこそ、小松島の会も、話はずみ、集まる人々も真剣なのである。いいお話、心に残る話がいっぱいあった。

裁縫箱を夫婦協力して作ってやったという青木さんの話、デパートで見られる品とは比較にもな

らぬ細工な手作りなのに子どもはとっても喜ぶ大事に使っているという。

椿さんの話は今年いたいた学校の通信票が話題、成績の評価は良くないけれど子どもは大喜びで帰り、「おかあさん、ここ大きい声で読んで聴いているから。」と子どもが指差す通信欄には「君はすばらしい能力をもっているが、今学期はそれがうまく出ませんでした。そのうちがんばればきつとすばらしい力を発揮するでしょう。それを楽しみにしています。」といった内容の先生の言葉。母親に大きい声で読ませて、子どもは「こんどは必ず頑張るよ」と誇らしげに言っていたという。

どうやらこれは紙数の尽きたこの報告の結論にしている美しい話ではあるまいか。

\* 小松島地区の会、次回は9月27日、午後2時より、テーマ「子どもと読書」会費100円(会場謝礼や茶菓代)。地区からの参加も観迎。大村榮、北村秀雄、菊地新が常時出席します。

「教育すばる」9号—1981年8月から

## ● 出版活動

大村らが設立して時をおかずに取り組んだのは雑誌「国語教育研究」の復刻であった。その意図を機関誌「教育すばる」2号に書き、会員に訴えている。次はその一部である。

「すばる」の事業のひとつは、この復刻を皮切り

にして、過去の遺産の復刻と教師の仕事を広く伝えることを目的とする「すばる教育双書」と名付ける出版であった。主な出版物名を次頁上段へ列記する。

『国語教育研究』復刻運動の成功のために

季刊『国語教育研究』は、1932(昭7)年4月、仙台で「会員組織の機関誌」として発刊されました。

発刊者は、「国語教育研究会」となっていますが、実質的な主宰者は菊池謙、そして本郷兵一(のち上京)のふたり(当時、ふたりとも宮城県女子師範付属小訓導)でした。……

この雑誌には、その当時の教育運動とその実践が生々と反映しています。執筆した延人数は377名に達し、当時の生活綴方・北方性教育運動に加わった人びとの名のほとんどを見出すことができます。

この機関誌は1938(昭13)年「時局に鑑み」休刊のやむなきに至りましたが、その歴史的意義はますます明瞭になりつつあります。

『すばる教育研究所』の使命のひとつは、地方のすぐれた教育遺産のほりおこしと発展的な継承にあります。その上、この6巻23冊のもつ意義は、けつして地方的なものに限定されていません。会員みなさまの絶大な御支持と御援助をおねがいたいとおもいます。

### 【主な出版物】

- 1、「国語教育研究」の復刻（1977年）
  - 2、すばる教育双書
    - 双書1「荒野にめばえる」（1979年）
      - ・村の昭和史（佐藤好一郎）
      - ・3年間の作文指導（太田貞子）
      - ・学級通信とその働き（遠藤惟也）
    - ・広瀬小学校における菅野門之助（中川正人）
  - 双書2「水脈は地下を流れる」（1980年）
    - ・教師入門おぼえ（小泉定光）
    - ・『はしりもの・かわりだね』の実践（植田健稔）
    - ・なんだ坂・こんな坂（皆川秀雄）
    - ・翔びつづける雁のつどい（菊地義彦）
  - 双書3「風の中の旗手たち」（1981年）
    - ・鈴木 道太（解説 菊地新）
    - ・佐々木 正（解説 宮崎典男）
    - ・菅野門之助（解説 中川正人）
    - ・平間 初男（解説 村田幸造）
    - ・旗手群像の構図（大村榮）
  - 双書4「読むよこびのとき」
    - 文学作品を学ぶ子ら—
  - 双書5「八島正秋の仕事」
    - 子どもと授業に生きた教師—
  - 双書6「表現にいとむ子ら」
    - 白川小の教育実践—
  - 双書7「つづり方指導の段階」
    - 刊行委員会編（1987年）—
- 3、復刻「カマラード」  
刊行委員会編（2000年）  
著者 宮崎典男（1997年）

## ● 創立20周年

機関誌「教育すばる」のことから語ることは適切であるかどうか迷うところだが、1987年1月に「教育すばる」29号が出て以来、10年間の空白期間を置いて1997年12月にやっと30号が出ている。

この29号と30号のあいだの10年間に何があったのか……。

「すばる」創立は、「じゃあ、研究所、私たちが創りましょう！」という大村のひとことで動き出したことは先に述べている。思うに、そのとき、大村の頭の中に一緒に創る仲間がすぐ描けたのだったと思う。少なくとも、宮崎典男・菊地新・村田幸造・鈴木市郎・北村秀雄らである。

すぐ大村の描いたとおりのメンバーがそろった。創立時の事務局の動きを見ても、大村への義理で集まったのではないことはよくわかる。ほとんどがかつての県教育研究所の同士であり、ひとりひとりが宮城を代表するすぐれた教育実践家である。

それだけに、それぞれは、退職後であっても、「すばる」以外にいくつもの仕事をもち超多忙な方たちであった。大村は、県教育百年史編纂委員会事務局長の仕事を1979年3月に終えても、市商工会史・角田高校80年史・東六番町教会百年史などの仕事がつづく。そのかたわら、「養賢堂からの出発」の出版もあった。菊地は、「すばる」創

立の前年の1976年1月に、主宰する短歌結社の機関誌「北炎」を「菊地新編集」と明記し創刊しており、各地へ講演で出かけることも少なくなかった。宮崎は、教育科学研究会国語部会の読み方指導理論の研究と授業についての論文執筆に忙しかつた。その他の人々も多忙は同様だった。

それぞれがその他の仕事で多忙であるにもかかわらず、「すばる」は出発時から、その活動内容の充実ぶりは驚きの一語に尽きる。

10年の空白ができた最大の要因は、本部事務局で企画運営に携わってきた方々が年を重ねることで体調不良に襲われたことによる。

次の大村の「創立20周年を迎えて」をお読みいた、いただきたい。

### 創立20周年を迎えて

大村 榮

よく「十年一昔」と言われた。変化が激しく、変わり身の早い最近の世情では、「10年前を大昔」と感じる人も少なくはなからう。まして、「志を立てて10年、どんな困難に出会っても、その節操を変えない」という意味の「苦節10年」などは、大方の人にとっては無縁だろうし、すでに「死語」として葬り去っているに違いない。

こんな時代に、「教育の荒廃から子どもを救う」ことを目指し、わが「すばる教育研究所」は、ただどしいながら、20年を歩みつづけて来たのである。

もつとも、1977年9月に発足した直後には、草創期からむ多少の困難はあったものの、寄せられる期待や激励や支援も大きく、滑り出しは予想以上に快調であった。

それがしばらくつづき、1986年9月には「草の根の教育改革を進める」を主題に第9回総会を開き、引きつづき研究発表とシンポジウムを持った。会場は日専連仙台台会館の会議室、参加者は54名であった。

研究発表は、3人の教師が実践を通し、授業を考えることをねらったが、いずれも創意に富む実践で、話し合いは興味深く示唆に富む展開となった。……

この第9回総会の報告は、創立10年目に入る1987年1月30日発行の「教育すばる」第29号に載せたあとバツタリと「教育すばる」は休刊に入り、9年間も眠りつづけた。ここに至って、私たちは不覚にも「苦節10年」という言葉の持つ厳しさに気づき始めた。しかし、その厳しさの本当の重さと痛さを知らされるのは、その後のこととなる。

第9回総会のあと、およそ10年近く総会は開かれなかったのである。と言って、研究所を解散したのである、その活動を停止したのではない。

「教育すばる」29号を発行した翌日の1月31日(土)から2月1日(日)にかけては、予定通り柴田町の施設「太陽の村」を会場にして一泊二日の「すばる教育研究所第7回合宿ゼミ」を実施し

ている。

また、その6月には、白石市白川小学校が宮城教育大学の中森孜郎教授の指導のもとに8年間も継続して来た「表現教育の成果」を「すばる教育双書6『表現にいどむ子ら―白川小の実践』』として刊行した。

その巻末に宮崎典男さんが、「この研究の経過とすばる教育研究所とのかかわり」にもふれて、「編集のあとに」を書きつづけている。

※

それにつけても、「白く厚みをもった層」と「硬く、緻密で褐色のうすい層」が交互に多重円を形成しているという「時のことは〈年輪と成長〉の意味するところは深く、とくに20年の歩みをつづけるわが研究所にとっては、過去と現在を理解し、将来を考える上に、まことに暗示されるところが大きい。―これを、わが研究所の20年の歩みに移して考えると、発足初期の10年の歩みは、残された資料も多く豊かで比較的容易にとらえることができるが、それにつづく遅々とした10年の歩みは、今すぐとらえてあらわにすることはできない。それだけに、その説明は今後の重要な課題となるう。

※

総会も開かず、機関誌も休刊し、合宿ゼミも中断、すばる教育双書の続刊もかなわず、所員も所友もそれぞれの持ち場で子ども・教師なかま・父母たちとのかかわりを深めるか、それぞれの書齋

にこもるかして、荒廃する教育の動きに立ち向かっていたはずである。

その寒冷と風雪の季節の遅々とした歩みが、果たして濃密な成長のあとを残したかどうかは、ここでは問うことをやめよう。いずれ、これも何年かのちに、明らかになることであり、明らかにすべきことでもある。

それを明らかにするには、発足初期の活動の主体となり、後援者となったメンバーの、それぞれの健康と活力に及ぼした「十年一昔」の側面をも見落としてはならない。

1991年3月に世を去った鈴木道太さんをはじめ、佐々木正、横沢文質、その他の諸先輩がつぎつぎと逝去した。そればかりか、「河北新報」の求めに応じ、「戦前からの綴り方教育に没頭―『鈴木道太先生を悼む』』を書いた菊地新さんまでが、当時すでに病床にあり、翌年5月に刊行された歌集『風樹抄』には生と死のはざまを意識しての深刻な苦悩が歌いあげられている。

1993年3月に横沢文質先生が93歳の高齢で逝去した時、『漾虚自伝 横沢文質90年の回想』の編集出版にあんなに情熱を注いでいた北村秀雄さんの表情にほほ肉をそぎ取られたような面やつれを見た記憶がある。あの頃すでにがんの再発がかなり進んでいたであろうか。

いまになって思うと、遅々とした進行ながら、いろんなことがからみあつて創立18年めの1995年も暮れて行った。

※

1996年の秋、春日さんからのお話があつて、さきに「すばる教育研究所」が復刻刊行した『国語教育研究』（6巻23号・付別冊1）を若い教師なかまとともに読むこととし、例会を月1回、第4土曜、会場を、門柱に菊地新さん揮毫の「すば



る教育研究所」の標札のある大村宅とした。

その集まりを重ねているうちに、宮崎典男さんが「つづり方指導の段階」を完成するという朗報、「すばる教育双書」としての一日も早い実現を願っている。

ところが、その頃、村田幸造さんの病状が悪化し、その回復が危ぶまれるようになった。奥さんとの共著で、きた出版から出した歌句集『風暦』は8月30日に発行。その跋文「相照双映」は奥様に先立たれ、郷里の瀬峰の自宅で療養中の菊地新さんが病床で書いた。その編集は菊池謙さん、出版の仕事は社長の北村秀雄さんに代わって北村哲也さんが担当し、立派に完成させた。

その村田幸造さんが12月に、明けて1997年1月17日に北村秀雄さんが、そして8月20日には菊地新さんが、愛惜の極みながらつぎつぎと逝去している。すばる教育研究所にとっては、創設以来の副所長のひとりと事務局長とを前後して失い、その悲しみは限りなく深いものがあつた。

その葬儀にあたっては、その都度、宮崎典男副所長をはじめ友人らと計り、研究所を代表して弔辞をささげた。しかし、生前のご尽力、ご貢献に報いるには、一日も速やかに研究体制をととのえ、発足以来の使命に向かつての教育成果を積み上げねばなるまい。

宮崎さんの「つづり方指導の段階」の出版祝いを兼ねて、まことに久方ぶりで、「すばる教育研究所第10回総会と呼びたい小さな集い」を開くこ

とができ、深く自分の微力を責めながら、ひとまず、この回想のペンを置くこととする。

## ● 「すばる」のその後

このような10年間、支えるべき所員たちは何をしていたのだろう。残された大村・宮崎はずいぶん悩みつづけたにちがいない。たいへん遅くなつて、復刻『国語教育研究』の読み会の提案（お願いをした（1996年）とき、大村は非常に喜び、例会日になると、その日の読みに関係する資料のコピーを用意して私たちを待つていてくださつた。

春日には大きく気になることがもうひとつあつた。それは、大村所長が「養賢堂からの出発」をまとめた後に、「次は『大正自由教育』を書く」と思うと言つたが、いっこうにその仕事に入っていないことだつた。いや、その時間をつくりだせなかつたというのが正しいだろう。それで、「春日が『教育すばる』編集を担当しますから、『大正自由教育』を『すばる』に連載のかたちで書き続けてください」と大村に頼んだ。

「連載のかたちなら……」と言いながらも大村に喜んで受けていただき、1998年3月発行「教育すばる」31号から「大正自由教育」の連載は始まった。

第1回は『大正自由教育』の流れ―流れる水のさやけきほとり1、吉野ハナ先生」。原稿を手にした春日はいよいよ始まったうれしさにひとり

喜んだ。

しかし、連載『大正自由教育』の流れ」は、1999年5月発行「教育すばる」36号の第5回「流れをさかのぼると」以降、休載になる。7月、大村の胃の手術のためである。その後書き継がれることはなく、2001年5月25日大村は昇天された。

2002年2月発行「教育すばる」46号は「大村榮所長追悼号」であり、その時の事務局・春日の名で、「会員のみなさんに」として、おおよそ次のようなことを伝え、「すばる教育研究所」は幕を閉じることになる。

### 会員のみなさんに

11月27日の新聞は、いつせいに教育基本法の改正諮問が中教審に出されたことを一面に大きく報じました。

このような重大な時期である11月25日、私たちすばる教育研究所は、残念ながら会の存続を問題にする総会を開かざるをえませんでした。

すばる教育研究所は、1977年9月に設立され、大村榮・菊地新・宮崎典男の連名で設立趣意書が出されています。それは、『教育の荒廃』が問題とされてからすでに久しい年月が過ぎています。しかし、現状ではまだ解決の手段が確立されていません」に始まり、「わたしたちは、そんな素朴な、そして、それだけに本源的な教育の出会いを期待しながら、それぞれの力を寄せ合って、

新しい教育研究所をつくらうと願っているのです」と結ばれていました。

以来25年間、過去の宮城の教育の掘り起こしと教育実践の推進に大きく寄与してきましたが、その中心になって研究所を運営されてこられた大村・菊地両先生が他界、宮崎先生は体調を崩し、菊地先生の後を担った鈴木市郎先生もまた病と闘っています。

総会では、「新たな核が複数出てくるまで休止せざるをえない」と「一度休止することは再起を困難にするので活動をつづけるべき」という二つの案が出て、二度にわたって話し合いました。

結局、結論を得ることはできず、もう少し時間をかけて、新しい道をさぐることになりました。

大村所長は、「教師の『戦後50年の思い』には、失意・敗北・悔恨・絶望の影が深いことであろう。しかし、幸いなことに、わたしにはこの現状からの脱出路について一つの予感がある。それは、わたしを育ててくれた『大正自由教育』の見直しである。それが、この国の歴史にどう芽生え、どう成長し、そして、どう挫折したかをつぶさに知ることである」と書き、その執筆にとりかかり、私たちはそこに大きな期待をもったのですが、その序章の段階で不帰の人になられました。

私たちは、大村先生にたいへん大きな仕事を託されたわけで、議論している間はなくすぐ引き継がなければならぬのですが、残された者にとっては力の及ばぬあまりに大きすぎる課題になりま

す。

歴史をていねいに見渡すことは、今歩いている道の確かめにとどまらず、これから展望するに欠かせぬ仕事であり、それに大村所長は自ら挑戦したわけでした。次々に出される政策の問題を追いかけるだけでは、いつまでも現状を打開することはできず、確かな教育の道を切り開くことはできないでしょう。

課題を明確に承知しながらたいへん辛いのですが休止し、再発の道を模索することにします。

「教育すばる」の最終号は2002年2月の「大村榮所長追悼号」であるが、これに先だって、宮崎の長期の個人的努力、第1期・第2期「カマロード」復刻作業は進められた。しかし、宮崎自身もこの初稿を終えた段階で入院、「復刻カマロード」が「すばる教育研究所」最後の刊行物として2000年8月に世に出されている。この刊行が「すばる教育研究所」の終焉を告げる書になると言っているであろう。小さい「すばる教育研究所」の残した私たちへの大きなメッセージはたくさんあるが、それを文章化することは、紙数が尽きたので後日にさせていたたく。

\*敬称は略させていただきます。

(文責 春日辰夫)